

「ふるさとちがさき」を再発見する67日間のキャンペーン・ちがさき丸ごとふるさと発見博物館企画展「つながるちがさき2013」が、10月16日（水）から12月21日（土）まで開催されました。

まち歩き企画やスタンプラリーを通して、たくさんの方々が茅ヶ崎市内を巡られ、「はじめて行く場所に行けて楽しかった」などの感想をいただきました。

企画展ガイドブック「ちがさき丸ごとふるさと発見博物館手帖」は多くのポイントで品切れとなり、まち歩き企画も早々に定員に達するなど、好評のうちに企画展を終えることができました。参加してくださった皆様、本当にありがとうございました。



（略称：ちがさき丸ごと博物館の会）の活動

■行事報告

- まち歩き 「ちがさきの大山道歩く」（丸ごと博物館企画展）
四ツ谷から鶴が台団地まで大山道を中心に周辺史跡、社寺を訪ねてのまち歩きをしました。
11月16日（土）9：00～12：30 参加者：20名
文教大生のガイドさんと紅葉の大山道周辺を歩きました。好天に恵まれ、赤羽根の農業ふれあい館では収穫祭も開催されており、楽しいまち歩きになりました。
- まち歩き 「高砂緑地から海へ ～南湖周辺の文化人を訪ねて～」(丸ごと博物館企画展)
高砂緑地から南湖を中心に茅ヶ崎ゆかりの文化人を訪ねてのまち歩きをしました。
12月7日（土）9：30～12：00 参加者：20名
人気のまち歩きコース2回目 南湖周辺のたくさんの文化人旧宅を訪ねて楽しいまち歩きでした。

ちがさき丸ごとふるさと発見博物館って何？

茅ヶ崎市の全域を屋根も壁もない博物館と見立てて、文化、歴史、自然、産業、商業、公共施設、人材など、「このまち」らしさをもついろいろな事柄を幅広く選び出し、これらを都市資源と呼ぶことにしました。これらの都市資源を調査・研究し、それぞれが持っている意味や魅力を広く市民に周知する一方、それぞれを関連付けて散策や各種イベントなどで活用を図ることにより、茅ヶ崎を改めて知り、茅ヶ崎を愛する心を育み、ひいてはまち全体の活性化を図ろうとするものです。そして、都市資源は地域のかけがえのない宝物として、地域により保護され育てられていくことになります。住民が、自分たちの地域の未来のために、自分たちの考えと力で運営していく姿勢を特に重要視しています。

編集後記

富士山を特集した今号。最後に富士山にまつわる小説をひとつご紹介します。富士山噴火を描いた歴史小説「怒る富士（上、下）」新田次郎著（文春文庫）。

宝永噴火のため田畑が火山灰に埋まり、農民が餓死に瀕しているとき、代官・伊那半左衛門は、駿府にある幕府の米蔵を開けて飢民を助けます。しかし、その咎を受けて幕府に捕えられ、江戸に送られて、死罪になったという話に感動します。代官というと、泣く子もだまる悪代官のイメージだけが強く頭の中にこびりついていたので、良心的代官の話が強く心に焼きつきます。＜同書の著者あとがきに記された、書くに至った動機（一部抜粋）＞。

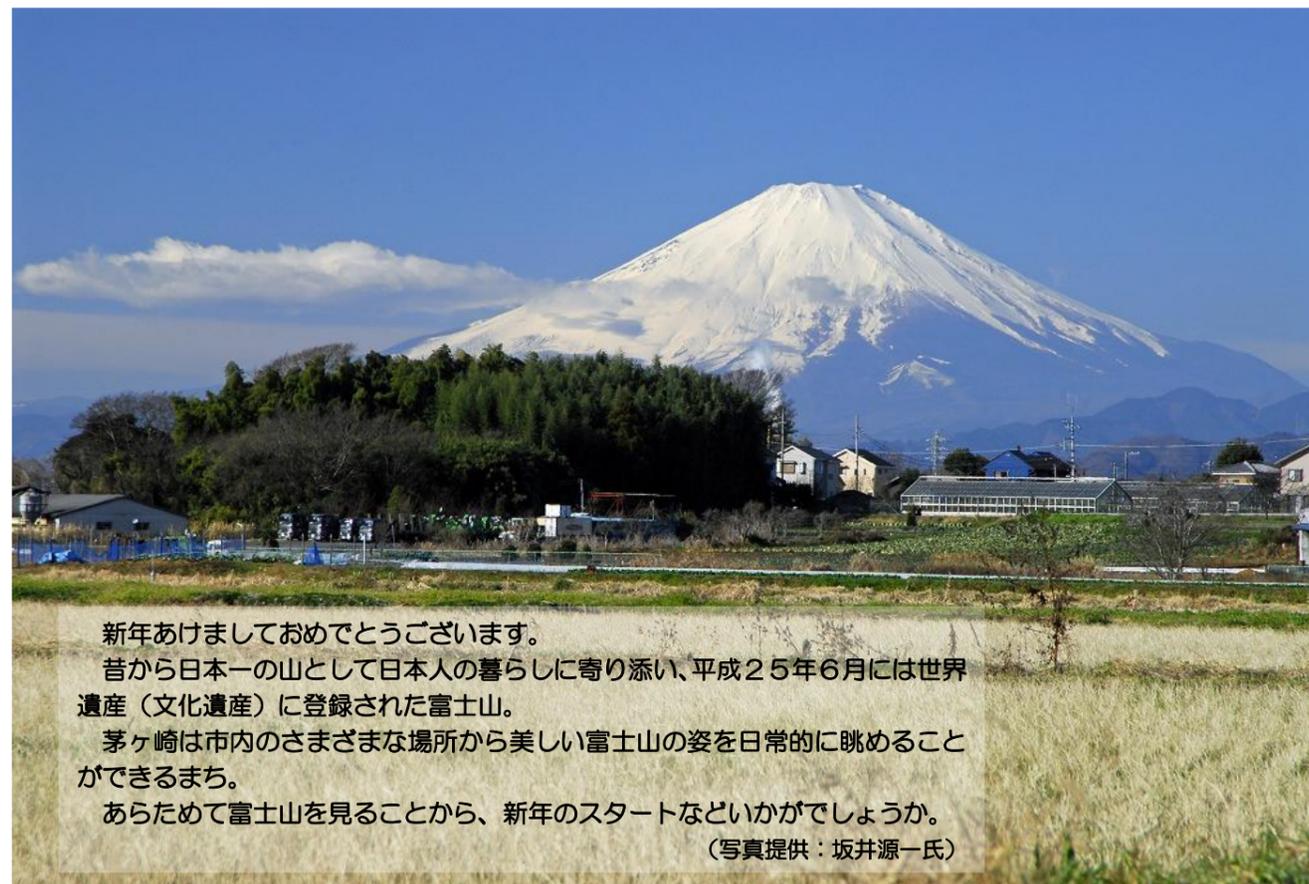
本年も「ちがさき丸ごとふるさと発見博物館季刊誌」をどうぞよろしくお願いたします。（川合）



（愛称は「ちがさき丸ごと博物館」）



茅ヶ崎から見る世界遺産・富士山



新年あけましておめでとうございます。

昔から日本一の山として日本人の暮らしに寄り添い、平成25年6月には世界遺産（文化遺産）に登録された富士山。

茅ヶ崎は市内のさまざまな場所から美しい富士山の姿を日常的に眺めることができるまち。

あらためて富士山を見ることから、新年のスタートなどいかがでしょうか。

（写真提供：坂井源一氏）

茅ヶ崎海岸の初日の出

元旦早朝、茅ヶ崎海岸へ向かう多くの人があります。カップルあり、子ども連れの家族あり、老夫婦あり……。皆、防寒対策をして海岸で初日の出を迎える人々です。

この10年位、海岸で初日の出を迎える人が大変多くなって来ました。江の島の右側から初日が昇ると、拍手する人、万歳を叫ぶ人、静かに拝む人とさまざまです。

西に目を転ずると、雪を戴いた富士山が初日を受けて、山頂より麓に向かってピンク色に染まって行きます。



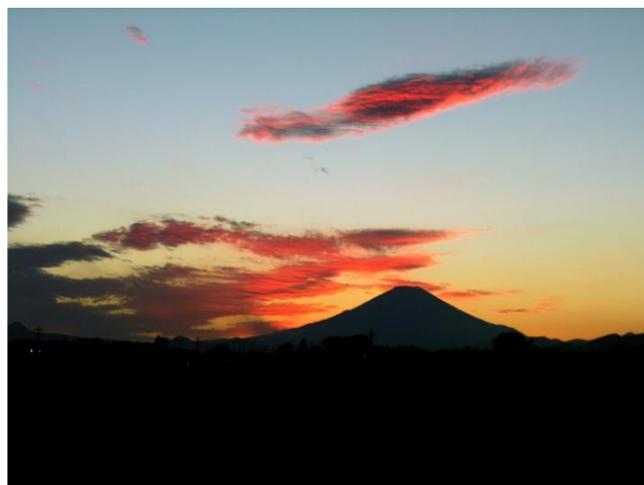
（写真提供：加藤幹雄氏）

みなさんには、お気に入りの「富士山ビュースポット」はありますか？

冬は空気が澄んで、富士山がより美しく見える季節です。寒いですがまちへ出て、見る場所によって表情を変える富士山を探しに行ってみてはいかがでしょうか。



▲芹沢から（写真提供：坂井源一氏）



▲芹沢から（写真提供：坂井源一氏）

観光案内所などで入手することができる「ちがさきガイドマップ」には、市内の文化財や公共施設などのほかに「富士山ビュースポット」が掲載されています。



▲小出から（写真提供：坂井源一氏）



▲腰掛神社から（写真提供：加藤幹雄氏）



▲国道134号線 浜須賀あたりから
（写真提供：加藤幹雄氏）



▲茅ヶ崎市営野球場から
（写真提供：加藤幹雄氏）



▲えぼし岩周遊船から
（写真提供：加藤幹雄氏）



▲茅ヶ崎海岸ヘッドランド近くから
（写真提供：加藤幹雄氏）

富士山あれこれ

茅ヶ崎の灰塚について

秀麗に見える富士も一度噴火をすると茅ヶ崎にも大量の降灰を及ぼし、当時の住民を苦しめたことでしょう。降灰の言い伝えや地名が今でも残っています。

①富士塚跡

「鶴が台中学校前」のバス停を北に行き、新湘南バイパスの下を大山道に出て少し西へ行った辺りに、昔、宝永4年（1707）の富士噴火の時の降灰（火山灰）を集めた小山がありました。今は姿をとどめていませんが、高さ6m、周り60mくらいで、山の上に祠があって何かの神霊を祭ってあったと言われています。

（出典：ぶらり散歩 郷土再発見 より）

②灰塚（ハイヅカ）・・・萩園の地名

産業道路「西の谷」バス停の西側で現在ほとんど宅地であるが、以前は畑であった。

昔、宝永4年（1707）の富士山噴火の灰を集めた塚のあったところであるといわれるが、延宝5年（1677）の古文書（検地帳）に「大灰塚」「小灰塚」の地名が見えている。

（出典：萩園のうつりかわり 萩園郷土史勉強会 より）

富士山あれこれ

お菓子の「富士美」

「地元で愛される和菓子をつくろう！」

60年前、伊与田一（すすむ）さんが、小田原から茅ヶ崎に来て創業する時、この熱い思いで茅ヶ崎中を見て回ったそうです。この時、気がついたのが、茅ヶ崎は左富士をはじめ、どこでも美しい富士山が見えるところだということで、それで店の名前を「富士見」にしたそうです。和菓子店なので「見」は「美」にしたそうで、「富士」を「富士」にしたのは登録時に「点」を打つのを忘れてしまったからだそうです。また、創業時は現在の茅ヶ崎駅北口のスルガ銀行の場所にあったそうです。

それから60年、現在は2代目の伊与田弘一さんが後を継がれています。茅ヶ崎の銘菓「奉行最中」は創業当時からのもので、現在もベストセラー。もちろん「大岡忠相」の名奉行を讃えたお菓子です。現在の売れ筋No.1は「かりんとうまんじゅう」、No.2が「かっぱどっくり」だそうです。世界遺産登録が決まった時には、富士山をかたどったお菓子を発売したそうです。

